

身代わりの婚約者は恋に啼<sup>な</sup>く。

一 身代わりの逢瀬

「やっと終わった」

「ねえねえ、これから飲みに行かない？」

オフィスの壁にかけられた時計の針が午後六時を指すと、みな作業を止め、帰り支度を始める。中には楽しげに、このあとの予定を話す人達もいた。

そんなやりとりを横目に、私も仕事で使っているノートパソコンをシャットダウンして、机上の電卓を引き出しの中にしまった。

私、桜井志穂は、事務機器やOA機器を扱う商社で経理事務をしている。

所属している経理課は定時退社が推奨されていて、月初や決算前以外は基本、みんな定時で上がった。

今日は花の金曜日。二連休を前にした仕事終わりということもあって、帰り支度をする同僚達の表情は解放感に溢れ、とても晴れやかだった。

(でも、私は……)

電源が落ち、真っ黒に染まった液晶画面に、冴えないOLの顔がぼんやりと映る。

肩下まで伸びた髪は、仕事中はいつも首の後ろで一本に結ゆわえていた。化粧も最低限で、華やかさは微塵みじんもない。

「……………」

疲れの色が見える表情がいつも以上に陰気くさい。私は自分から目を背そむけるようにボタンとノートパソコンを畳たたんだ。

（早く、行かなくちゃ…………）

「桜井さん」

席を立ったところで、同僚に声をかけられた。

彼女は私の同期で、同じ経理事務員の鈴木すずきさんだ。栗色に染めたふわふわの髪が、彼女の愛らしい顔立ちによく似合っている。

「これから何人かで、女子会としてごはんを食べに行こうって話してるんだけど、桜井さんもどう？」

鈴木さんは社交的な性格で、しばしば会社の人と飲みに行ったり食事に行ったりしているらしい。そして私のような付き合いの悪い人間にも、明るく誘いの言葉をかけてくれる。

（女子会かあ、楽しそう）

正直、行ってみたいと思った。けれど――

「ごめんさい。今日は、先約があつて…………」

私はぺこりと頭を下げ、鈴木さんのお誘いを断った。

「そっかさっかー。先約つて、もしかしてデート？」

「……………みたいなの、ものです」

鈴木さんの言葉に、私は曖昧あいまいに笑う。

「ごめんさい」

「いやいやいや、気にしないで！ こっちこそ、急に誘つてごめんね」

「いえ、声をかけてもらえて嬉しかったです。また誘つてください」

私はもう一度頭を下げ、バッグを手にオフィスを出た。

すると背中越しに、鈴木さんや他の女性社員達の声が聞こえてくる。

「ほらー、やっぱり桜井さんだめだったじゃん」

「んー、今日こそはつて思ってたんだけど」

「金曜日は毎週そそくさと帰っちゃうんだよね。彼氏とデートかあ、いいなあ」

「でも、デートにしてはテンション低くない？」

「桜井さん、いつもテンション低いじゃーん」

あははははと、女性社員達の笑い声が耳を打つ。

確かに今の自分の顔は、恋人と会う女にしては暗すぎるし、テンションも低すぎるのだろう。

（だって、仕方ない…………）

これから会う彼は、『私の恋人』ではないのだから――

更衣室で制服から通勤着に着替えた私は、足早に会社の最寄り駅へと向かう。そして改札内にあるコインロッカーから、小ぶりのキャリーケースを取り出した。

その、なんの変哲もない黒いキャリーケースをガラガラと転がして電車に乗り、二駅先で降りる。真つすぐ進む先はトイレ。この駅は数年前に改装されたばかりで、トイレも新しく綺麗かつ、個室が広めなのでとても助かっている。

幸いにしてトイレは混んでいなかった。私は個室に入り、キャリーケースを開ける。

この中には服、靴、アクセサリー、メイク道具が一式入っている。私は地味な通勤着を脱ぎ、キャリーケースに入っていた服に着替えた。

今日持ってきたのは、なめらかな光沢が美しいホワイトシルクの半袖ブラウスと、鮮やかな深紅のウールツイードスカート。膝丈のプリーツスカートで、重厚感のあるシルエットが非常に上品に見える。アクセントとして、腰にはゴールドのチェーンベルトを巻いた。

そして上に羽織るのは、スカートとお揃いのジャケット。シャツは長袖にしようかとも思ったけれど、このジャケットを着るから、結局半袖にした。まだ十月の半ばだし、これくらいがちょうどいいだろう。

ストッキングも穿き替えて、通勤用のぺたんこ靴を七センチヒールの黒いパンプスに替える。

次に取り出したのはヘアアイロン。これはコードレスタイプで、充電しておけばコンセントに繋がなくても使えるから重宝している。

私はひつつめ髪を解き、毛先をふんわりと巻いた。続いてティアドロップ形で内側に小粒のダイ

ヤモンドが輝く、ゴールドのイヤリングを着ける。

そこまで終わったら、通勤用のバッグの中身とメイクポーチをこの服に合わせたブランドバッグに入れ、残りの荷物をキャリーケースにしまつて、個室を出た。

そして仕上げは、女子トイレ内にあるパウダールームで。

一度メイクを落とし、ファンデーションを塗り直すところまでは、会社のトイレでやっておいた。あとはいつかデパートの美容部員さんに教わったように、チークをほんのり塗り、アイラインを引き、ブラウン系のアイシャドウをまぶたに重ねていく。

眉ペンシルで眉毛も整えて、睫毛にマスカラを塗り、品の良いピンクのルージュを引いたら完成だ。

人が多く出入りする駅のトイレに長時間居座るのが申し訳なく、メイクはなるべく早く終わらせるようにしている。

それでも、いつもの何倍もの手間をかけて施した化粧は、私の顔の印象をがらりと変えた。

(……ああ、本当に、見てくれだけはそっくり)

鏡に映る自分に、にっこりと笑いかける。

この笑い方も、このメイクも、この服装も。全て私の亡くなった姉を模したものだ。

(行かなくちゃ。美穂の、代わりに……)

自分の姿に不備がないか鏡でチェックして、トイレをあとにする。

駅の入入り口付近にあるロッカーにキャリーケースを預け、そこからはタクシーを使い、彼の待

つホテルに向かった。

道すがら、タクシーの運転手さんに「デートですか？」と尋ねられる。

それに、会社で鈴木さんに聞かれた時と同じく「ええ、そんなようなものです」と答えた。

私はこれから、死んだ双子の姉の代わりに、姉の婚約者だった男性と会う。

姉の美穂と私は一卵性の双子で、同じ顔かたちをしていた。

けれど同じなのは造形だけ。中身は正反対。

地味で内気な私と違って、美穂は明るく社交的で、いつも人に囲まれていた。

見た目も華やかで、自分を磨く努力を怠らず、どんな時も綺麗に装っていた美穂と、私を見間違

える人はいなかった。

ただど今、私はこうして美穂そっくりに自分を作り変えている。

たぶん、会社の人が今の私を見ても、すぐにはあの地味で冴えないOLの桜井志穂だと気づかないんじゃないかな。

そんなことを思っている間に、タクシーは目的地である都内でも有数の高級ホテルに着いた。

彼はよく、私との逢瀬にこの場所を選ぶ。お互いの勤め先から近く、通いやすいからだろう。

高級ホテルらしい毛足の長い絨毯の上を歩き、一階にあるカフェラウンジに向かう。そこが彼の待ち合わせ場所だ。

約束の時間は七時で、今は六時四十分を少し過ぎたあたり。少し早いけれど、彼はもう来ている

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

かもしれない。

「志穂」

彼の姿を探して席を見回すと、聞き慣れた声が私の名を呼んだ。

「楓馬さん……」

声が出た方に視線を向ければ、四人用のソファ席に座り、こちらに軽く手を上げていている人物がいる。

長身で細身の身体にぴったり合ったフルオーダーのスーツを嫌みなく着こなす彼の名は、三柳楓馬。業界でも一、二を争う大企業、三柳建設の御曹司で、亡くなった姉の婚約者だった人。

そして、今は私の婚約者でもある人だ。

顔立ちは人形のように整いつつも優しい雰囲気があり、淡い茶色の髪と相まって優雅な印象を与える。人の——特に女性の目を惹きつける容貌だ。現に今も、カフェラウンジにいる女性客がちらちらと彼を見ては頬を染めていた。

気持ちにはわかる。私だって、楓馬さんを見ると未だに心が騒いでしまうもの。

「お待たせしてすみません」

女性達の熱い視線に居心地の悪さを覚えながら、私は彼のもとへ行き、遅参を詫言った。

「ううん、俺も今さつき着いたばかりだから、気にしないで」

楓馬さんはそう言って、自分の向かいに座るように勧める。

私が着席すると、タイミング良く店員さんがオーダーをとりに来た。

彼の前にはホットコーヒーのカップ。私も同じものを頼んだ。店員さんが席を離れたのを見て、

楓馬さんが再び口を開く。

「今日も綺麗だね、志穂。そのイヤリングも着けてもらえて嬉しい。よく似合っているよ」  
「あ、ありがとう、ございます……」

私の耳を飾っているイヤリングは、以前彼に贈られたものだ。  
褒めてもらえて、気づいてもらえて、嬉しい。

……でも同じだけ、胸が痛い。

だって彼が愛しているのは、私ではなく美穂だから。

このイヤリングだって、本当に贈りたかった相手は私ではなく姉だろう。

美穂が亡くなった今も、楓馬さんは変わらず姉を想っている。深く、深く……

顔かたちだけは同じ妹の私を、身代わりとして傍に置こうとするくらいに。

約一年半前——姉の美穂が亡くなったあと、ほどなく私が楓馬さんの新しい婚約者になった。

元々美穂と楓馬さんの婚約は、両家の結びつきを強固にするための政略結婚。

それでも二人は、家の思惑とは関係なく愛を育んでいた。美穂が亡くなりさえしなければ、二人はきっと幸せな夫婦になっていたことだろう。

ところが美穂は交通事故に遭い、二十三歳という若さでこの世を去ってしまった。

そして双子の妹である私にお鉢が回ってきた、というわけだ。これは、うちの父がぜひにと言いつつ出したことなのだから。

姉が死んだから代わりに妹を……なんて、ひどい話だよ。

けれど、私の両親はどうしても彼の家——三柳家と繋がりをもちたかったし、楓馬さんもまた、私が新しい婚約者になることを望んだらしい。

私が、見てくれだけは美穂にそっくりだったから。

そう。楓馬さんは私を通して、亡くなった姉を見つめ続けている。

彼が与えてくれる優しさも、愛情の籠った甘い眼差しも、全ては私ではなく、美穂に向けられたもの。

そうとわかっていて、私は楓馬さんに会いに来る。

それを私の両親と、彼自身が望んだから。

そして、私も楓馬さんを……

「志穂？」

「……っ、ごめんなさい。ぼうっと、しちゃって」

食事の途中、物思いに耽っていたところに声をかけられ、慌てて謝る。

あのあとラウンジでコーヒーを飲んだ私達は、楓馬さんが予約してくれていた、ホテル内にあるフレンチレストランに移動し、夕食をとっていた。

「仕事で疲れているのかな？ いつも俺の都合で呼び出してごめんね」

「いえ、そんな……」

気遣われ、心苦しくなる。

大企業の後継者として日々多忙を極めている彼に比べたら、私の仕事の疲れなんて軽いものだ。私は曖昧あいまいに笑って、食べかけの肉料理を切り、口に運ぶ。

神戸牛ロースのポワレ、だったつけ。ミディアムレアに焼かれたお肉はうっとりするほど柔らかく、脂あぶらもしつこくなくて、とても美味しい。

他の料理も、見た目、味ともに最高の一品ばかりだった。

しかも、ホテルの上階に位置しているので、テーブルから都内の夜景が一望できる。いかにも人気のデイトスポットといった感じの店だ。

彼は、身代わりの私にも非常によくしてくれる。高価なプレゼントをくれて、素敵なレストランで美味しい料理を食べさせてくれる。

たぶん、これが楓馬さんと美穂の当たり前のデートだったのだろう。

思えば姉は、いつも上等なものに囲まれていた。そして、それが似合う人だった。

「すごく、美味しいです。ありがとうございます、楓馬さん」

美穂ならきつと、そう言っただけです。

生前の姉の華やかな笑顔を思い出して、なるべく似せて笑ったところ、楓馬さんは「よかった」と、嬉しそうに微笑んだ。

(楓馬さん……)

彼の笑顔を見ると、胸が熱くなる。

そして同じくらい、ツキンと痛くなる。

(ああ、どうして美穂は死んでしまったんだろう)

あんなことが起こらなければ、今ここでこうして彼と微笑み合っているのは、私ではなく美穂だったのに。

楓馬さんと会っていると、より強く、亡くなった美穂のことを意識してしまう。

そんな内心を表に出さないよう必死に笑顔を取り繕繕いながら食事を終え、私は彼に連れられて同じホテル内にある客室に移動した。

楓馬さんとの逢瀬あひまは、ホテルで食事をしてそのまま客室に籠こもるパターンが多い。二人で泊まっていくこともあれば、どちらかが先に帰ることもある。そのあたりは都合によってまちまちだ。

彼にエスコートされてやってきたのは、いつもと同じ、広々とした部屋の中央に立派なベッドが置かれたダブルルーム。室内はブラウンを基調とした落ち着いた色合いでまとめられていて、一流ホテルならではの上品な雰囲気あまなを醸かみ出していった。

部屋の奥にある大きな窓からは、先ほどのレストランと同じく都内の夜景を楽しめる。けれどこれまでの経験上、ゆっくりと夜景を眺めることはないだろう。

「志穂……」

ボタンと重い音を立てて、私達の背後でドアが閉まる。

まるでその音を合図にするかのように、楓馬さんは私を強く抱き締め、唇を奪った。

「んっ……」

激しく貪むさられ、否いな応おうなく、身体に情欲の火が灯る。

食事のあと、レストランの化粧室で塗り直した口紅は、きつとすつかり剥がれてしまっただろう。  
「んっ……んう……っ、ふあ……っ」

「……っ、やっつと、二人きりだね」

熱っぽく囁いて、楓馬さんはくすりと笑う。

彼の薄い唇は、私の唇から移った口紅の色でほんのりと染まっている。それが妙に艶っぽくて、背筋がぞくぞくと震えた。

「可愛い、志穂……」

「……あっ……」

そして今度は首筋に口付けられ、甘噛みされる。

その刺激は甘い官能をもたらし、より私の劣情を煽った。

外ではとても紳士的な人なのに、二人きりになったとたん、楓馬さんは少しばかり性急に、荒々しく事を進める。

けれど私は、彼が見せてくれるそんな一面も嫌いになれなかった。

「あ……っ、ん……っ、は……っ」

再び唇を奪われ、身体が軋むほど強く抱き締められる。

息が苦しい。でも……やめられない。やめたくない。

「はあ……っ、あ……っ」

楓馬さんとするキスは、いつも私を熱くする。

彼の舌で歯列をなぞられ、舌を絡め取られるだけで、私の中の女の部分が疼いて疼いてたまらなくなるのだ。

「……志穂……」

「……っ」

いったん顔が離れたかと思うと、吐息交じりの熱い声に名を呼ばれ、ドキツとする。

志穂、と確かに自分の名前を呼ばれたのに、一瞬『美穂』と呼ばれた気がしたのだ。

(なにを、馬鹿なことを……)

私は美穂の身代わりなんだから、そう呼ばれたっておかしくない。なのに『美穂』と呼ばれたような気がただけで、こんなにも胸が痛むなんて……

傷つく資格など、私にはないのに。

(……ごめんなさい……)

罪悪感が込み上げてきて、私は心の中で亡き姉に謝った。

妹が自分に成り代わって婚約者に抱かれるのは、美穂にしてみればさぞ業腹だろう。

なのに私は、彼の手を振り払うことができない。

それどころか、自ら進んで楓馬さんに身を投げ出してしまっている。

(ごめんなさい……)

謝ったからといって許される行為ではないと、わかっている。

亡くなった姉の代わりに抱かれるのは、不毛な行為だとも。



それでも私は、彼と会うことをやめられないのだ。  
楓馬さんに抱かれることを、心の底から拒めない。

だって、私も彼を愛しているから。初めて出会った時からずっと、姉の婚約者であり、姉の恋人であつた楓馬さんに焦がれている。

(楓馬さん……)

いずれ、こんな歪な関係は終わりを迎えるだろう。

今は私を美穂の代わりとして求めている彼も、遠からず目を覚ますはずだ。

だけどその時までには……。楓馬さんが私を望んでくれる限り、彼の傍にいたい。

だから私は姉への罪悪感を抱きながらも、彼が与えてくれる快楽に身をゆだねてしまうのだ。

一時のことだから許してほしいと、亡くなった姉に言い訳して。

(なんて、嫌な女だろう……)

そう自分を蔑みつつ、今度はどちらからともなく唇を合わせ、お互いの身体を弄り合う。

「ん……っ、はあ……っ」

何度も何度も深いキスを交わす間に、楓馬さんは私の肩からバッグをとり、床に落とした。続いてジャケットも脱がされ、もつれ合うようにベッドに押し倒される。

「あっ……」

その拍子に、私の足から靴が脱げかけた。

すると、中途半端に爪先に引っかけた靴に気づいた楓馬さんが、恭しくそれを手にとり、床

にそつと並べて置いてくれる。

さつき落としたバッグやジャケットとはえらい違いだ。この差はなんなんだろうと思っていたら、彼はにやつと笑みを浮かべ、私の右足をとった。

「えっ、あつ、やつ……!」

楓馬さんは床に跪き、あろうことか私の足を——ストッキングに包まれた爪先を口に含む。

「だ、だめっ、汚いっ……」

「汚くなんてないよ」

そう言つて、楓馬さんは親指の腹をぺろつと舐めた。

「んんっ……」

ねつとりと唾液を絡ませた舌に舐められただけで、私の身体はびくつと反応する。

止めなければならぬ。彼にこんなことをさせてはいけぬ。そう思うのに、ちゅぽちゅぽと音を立てて足の指をねぶられるのが気持ち良くて、足の裏を舐められただけで感じてしまつて、止められなかつた。

「はあっ……」

それに気を良くしたのか、楓馬さんは左足も同様に愛撫する。

彼の舌に、唇に触られる度、私はびくつ、びくつと身体を震わせた。

やがて楓馬さんはベッドに上がつて私の左足を持ち上げると、足首から太もも、膝へキスを落としていく。

「ごめん、志穂。このストッキング、破いてもいい？」

そう尋ねてくる彼は、いつも以上に興奮しているように見えた。

「……っ」

戸惑ったけれど、楓馬さんがそうしたいならと、小さく頷く。

「ありがとう」

彼は嬉しそうに微笑み、ストッキングに手をかけ、びりつと破いた。

「んっ」

左足だけでなく右足も、一か所だけでなく何か所も破かれて、私の両足を包んでいた薄い膜にはいくつもの穴が開いてしまう。

(なんだか、乱暴されているみたい)

荒々しくストッキングを破られ、無理やり犯されている気分になる。

でも怖いとか、嫌だとかは微塵も感じなくて、むしろ……興奮してしまった。

私って、自分で思うよりずっと変態なのかもしれない。

「んっ……」

そう思考を巡らせている間に、露わになった足に楓馬さんの唇が落ちてくる。

「あっ……あ……はあっ……」

薄い膜越しに舐められるのはまた違った感触に、艶めかしい吐息が零れた。

「はあっ……、……ん……っ」

ぺろぺろと生肌を舐められて、軽く甘噛みされる。くすぐったくて、こそばゆい。

それでも楓馬さんは、痕が残るほどきつく吸ったりはしない。一度、服で隠れない部分に痕をつけられた時、「見えるところには残さないでほしい」とお願いしたのを、律義に守ってくれているのだ。

楓馬さんの唇は、どんどん上へと上がってくる。

スカートがめくられて、ストッキングと下着に守られた秘所が彼の眼前に晒された。

「……………」

楓馬さんとはもう何度も身体を重ねているけれど、こうしてまじまじと恥ずかしい部分を見られるのには未だ慣れず、つい顔を背けてしまう。

「……………」

「んっ」

彼がそこに顔を埋めたかと思うと、布越しに、秘裂をぺろぺろと舐められた。

湿った感触が伝わってくる。なのにストッキングと下着に阻まれて、ひどくもどかしい。

早く直接触れてほしいのに、楓馬さんは執拗に、焦らすように布の上からの愛撫を続ける。

「あっ、ああっ……」

唇だけでなく指の腹で撫でられて、時折息を吹きかけられて、私はたまらず彼の頭を掴んだ。

「やっ、あっ、あっ……んっ」

気持ち良い、気持ち良い……っ。

でも、もどかしいの。これじゃ足りないの……っ。

「楓馬さ……っ」

求めるように、ねだるみたいに、私は彼の名を呼んだ。

すると楓馬さんは、私がそうするのを待っていたかの如く、愛撫の手をぴたりと止める。

「可愛いね、志穂」

彼はようやくストッキングごと私の下着に手をかけ、脱がしてくれた。

「んっ……」

スカートは穿いたままなのに、その下には何も無い。

露わにされた恥ずかしい部分の、薄い茂みの下はすでに濡れていた。布越しに染み出した彼の唾

液と、自らの蜜とで。

「こんなに濡らして……。早く食べてって、誘っているみたいだ」

楓馬さんはうっとりときき、再びそこに顔を埋める。

「ひうっ……」

彼の舌に直接舐められる。待ち望んでいた刺激に、電流がビリッと走るのに似た快感を覚えた。

「あっ、ああっ……んっ……」

楓馬さんの愛撫はいつも丁寧で、そして執拗だ。

ちゅうちゅうと蜜を啜り、鬚を一枚一枚丁寧に舐めて、一番敏感な芽をねぶっては、さらに蜜を

溢れさせる。

「あっ、ああっ」

気持ち良くてたまらなくて、頭の中がどうにかなりそう。

しかも彼は、口だけでなく指でも刺激を与えてくる。

「ひあああっ……!!」

指の腹で芽を擦られて、摘まれて、悲鳴じみた声が零れた。

「志穂のここ、ぶっくりしてる。美味しそう……」

「んんんっ……!!」

硬くしこった花芽に、楓馬さんの舌が伸びてくる。

そして舌先でちろちろと転がすように舐められて、私はびくびくっとして身体を震わせた。

「あっ、ああっ……」

果ての気配が近づいている。

「もう、だめえ……っ、イ……っ、イッちやう……っ」

「うん、イッていいんだよ、志穂。俺の前で、淫らに果ててみせて……?」

私の秘所を舐めながら、楓馬さんが焚きつけてくる。

「んうっ……あっ、ああっ……」

そして、彼の指に容赦なく花芽を摘まれた瞬間――

「ああああっ……!!」

私はびくん! と一際大きく身体を震わせて、絶頂を迎えたのだった。

「……あつ……はあ……っ」

一度果ててもなお、その余韻に痺れる私の身体は勝手に快感を得てしまう。

そんな私の頬に「とても可愛かったよ」とキスをして、楓馬さんはいったんベッドから下りた。彼は自分のネクタイに手をかけ、ゆっくりと服を脱いでいく。

私はぼうっとしたまま、徐々に露わになっていく楓馬さんの身体を見つめていた。

彼の身体は、細身ながらもとても引き締まっている。なんでも健康維持のため、ジムに通って鍛えているらしい。

やがて下着一枚の姿になった楓馬さんは、脱ぎ捨てたジャケットの内ポケットから数枚綴りの避孕具を取り出して、ベッドに戻ってきた。

そして避孕具を布団の上に置き、今度は私の服に手をかける。

ブラウスとスカート、それからブラジャーを脱がされて、私は生まれたままの姿でシートの上に転がされた。

ああでも、まだ身につけているものがある。

「これも、とってしまおうね」

楓馬さんは私の髪を優しく左耳にかけ、イヤリングをそと外した。

同じく右耳のイヤリングも外して、サイドボードの上に置く。そして軽くなった耳たぶの、留め具に挟まれてへこんだ部分に唇を寄せて、ちゅっど口付けた。

「んん……っ」

彼の柔らかい前髪が頬をくすぐって、こそばゆい。

それに、耳たぶを舐められるのも……感じてしまう。

私の性感帯を知り尽くしている楓馬さんは、そうして耳を愛撫しながら、手を私の胸元に這わせた。

「あっ」

これまでずっと放っておかれていた胸に、ようやく触れてもらえる。

優しいタッチで撫でられ、やわやわと揉まれて、じわじわと高まっていく快感に身体が震えた。

そして時折、指の腹で頂をくりくりと擦られ、転がされる。

「ああっ……っ」

「志穂は胸の感度も良いよね」

私の耳元で、楓馬さんが楽しげにそう囁いた。

「どこもかしこも柔らかくて、手にびったりと吸いついてくる。それに、気持ち良くなってくると身体がほんのり赤く色づいて、本当に……可愛いっらないな」

「楓馬さ……っ」

彼はいったん身を離すと、今度は唇で私の胸を、指で秘所を愛撫し始めた。

「んんっ……っ」

胸の頂を食まれながら、未だしつとりと濡れている秘裂を暴かれ、蜜垂に指を挿し込まれる。

初めて楓馬さんを受け入れた時には硬く閉じていたことも、今ではすんなりと彼を受け入れてしまいうくらい、柔らかく花開いていた。

「あつ、ああつ」  
濡れそぼる蜜壺を、楓馬さんの指でじゅぷじゅぷと犯される。

彼が指を動かす度に淫らな水音が響いて、恥ずかしくて、でも気持ち良くて、たまらなくて……  
「はあつ……っ」

また、果ててしまいそう。

けれどそうなる前に、楓馬さんは私の蜜壺から指を引き抜いた。

「あつ……っ」

「そんな名残惜しそうな顔してもだめだよ。俺も、そろそろ限界だから……」

言って、彼は私から身を離す。

そして下着を脱ぎ捨てると避妊具を取り出し、屹立する自身に被せた。

(あ……)

「触って、志穂」

私の上に跨った楓馬さんが、私の手を取り、自身へと導く。

薄いゴムの膜に覆われた彼の肉棒はとても硬かった。これからこの凶器に貫かれるのかと思うと  
たまらず、私は期待と悦びに息を呑む。

「楓馬さん……」

「うん」

私が彼の名を呼んだのを合図に、楓馬さんは私の太ももを掴んで開かせる。そして秘裂に自身を

宛がい、ゆつくりと入ってきた。

「んんっ……っ」

この瞬間だけは、何度経験しても少し苦しい。

「くっ……」

ただどいつも余裕綽々といった様子の楓馬さんの、余裕のない、切なげな表情が見られるのが  
嬉しかった。

「……っ、はあ……っ」

彼の薄い唇から、艶めかしい吐息が漏れる。

そうして自身を根元まで埋めた楓馬さんは、「動くよ」と言ってから、腰を前後に動かし始めた。

「んっ、んんっ、あつ、ああつ……んっ」

ゆさゆさと身体を揺らされて、何度も何度も彼自身を突き入れられる。

穿たれる度に、私の口からは甘い嬌声が零れた。

「あつ、ああつ」

「志穂……っ」

それが楓馬さんを煽るのか、彼は徐々に腰の動きを速めていった。

「んあつ、ああつ」

(はっ、はげ、しい……っ)

容赦なく腰を叩きつけられて、結合部からばちゅっ、ばちゅっと水音が響く。

でも、激しくされるのは嬉しい。それだけ自分が求められているように思えるから。

(楓馬さん……っ)

身代わりでも、いい。

彼が本当は美穂を相手にしているつもりなのだとしても、楓馬さんに抱かれるだけで、私は幸せを感じずにはいられないのだ。

「あつ、ああつ、あつ」

そんな自分をあさましい、はしたないと責める気持ちは拭えないけれど、彼が与えてくれる快樂に溺れてしまう。

(ごめんなさい、ごめんなさい……っ)

「あつ、ああつ……!!」

私は両手でシーツをぎゅっと握り、二度目の絶頂を迎えた。

「……っ」

その拍子に、意図せず彼自身をきゅうつと締めつける。

とたん、私を見下ろす楓馬さんの顔がくつと快樂に歪んだ。

(かわいい……)

私は彼の頬に手を伸ばし、しつとりと汗ばんだ肌を撫でる。

楓馬さんのことが可愛くて、愛おしくて、我慢できなかったのだ。

「……っ」

楓馬さんは息を呑み、それから私の手をとって、その掌にちゅつとキスをしてくれた。

そして再び、ゆっくりと腰を動かし始める。

まだ終わってないよと、私に教えるみたいに。

「あつ、あつ、ああつ……」

「志穂……っ、志穂……っ」

彼の果ても近いのか、楓馬さんは切羽詰まった声で私の名を呼びながら奥を穿つ。

絶頂を迎えたばかりでより敏感になっていた身体は、それだけであつという間にまた快樂の高みへと押し上げられ――

「あつ、やつ、イツちゃ……あああああつ!」

「……っ!」

ゴムの中に精を吐いた楓馬さんと同時に、三度目の果てを迎えたのだった。

「志穂、志穂……」

「ん……」

名を呼ばれ、肩を優しく揺り動かされる。

どうやら私は感じすぎて、少しばかり気を失ってしまっていたらしい。

「楓馬さ……」

「とても可愛かったよ、志穂」

彼はそう言つて、私の唇にちゅつと口付けてくれた。

どうやら楓馬さんに満足してもらえたようだ、嬉しくなる。

それにセックスの間、何度も甘く、切なげに名を呼ばれたことを思い出し、胸がときめいた。けれど……

「……っ」

こちらをじつと見つめている彼の瞳には、私の姿が映っている。

美穂にそっくりの、私の顔が。

(……ああ)

それを認めた瞬間、高揚していた気持ちに冷や水をかけられた思いがした。そうだ。彼が本当に呼びたいのは私の名前じゃない。

彼が本当に抱きたいのは——愛したいのは私じゃなくて、姉の美穂なのだ。

(ごめんなさい……)

美穂じゃなくて、ごめんなさい。

美穂じゃないのに、楓馬さんに抱かれて、悦んで、ごめんなさい……っ。

彼との逢瀬は、いつもこう。楓馬さんに会えて嬉しく感じると同じだけ、彼や姉に対して後ろめたくて、気が塞ぐ。

どうしてあの日、死んだのが自分じゃなくて美穂だったんだろうって、思ってしまう。

「……」

「志穂……？」

「……っ、あ、ごめんなさい……。ぼうつと、して」

「やっぱり疲れてるんじゃないの？ 今日はまだ休もうか？」

「ちがつ……、そうじゃ、なくて……」

私の心が弱いから、悪いのだ。

楓馬さんが今でも美穂を愛しているとわかっているのに。

わかっただけで、身代わりになることを受け入れたのに。

未だにいちいち傷ついて、後ろ向きな感情に囚われる。

「……楓馬さん……もつと、して……」

私は二人に対する罪悪感と、自分に対する嫌悪感から目を逸らし、逃れるみたいに彼へ縋った。初めて楓馬さんと身体を重ねた時と、同じように。

「抱いて……」

「志穂……」

快楽に溺れている間だけは、それ以外のことを感じずに済むから。

忘れていられるから。だから……

「……わかった」

楓馬さんは頷いて私の手をとり、指先にキスをくれた。

彼に口付けられると、そこから温かいものが広がっていくような感覚が生まれる。

少しだけこそばゆくて、気持ち良い。

「もっと、いっぱいキスして」

そうねだれば、楓馬さんはくしゃつと顔を歪め、「あんまり可愛いこと言わないで」と言った。「箍たがが外れて、優しくしてやれなくなる」

「それでもいい」

彼になら、きつと何をされても許せるから。

優しくしてくれなくてもいい。

乱暴にされてもいい。

美穂の代わりでも……いい。

何をされても、構わないから。だから……

(今だけは、私を抱いて、放さないで)

言葉にできない想いを、胸に抱く。

彼は私の姉が愛した人。私の姉を、今も愛している人。

本当はきつと、こんな風に触れ合うことすら許されない人。

「志穂……っ」

それでも今だけは、私の名を呼んでくれるから。

身代わりでも、私を求めてくれるから。

私は世界で一番愛しているこの人に、縫すらずにはいられないのだ。

## 二 姉の婚約者

私達姉妹と楓馬さんの出会いは、八年前。

私達が十七歳、楓馬さんが十九歳の年の夏のことだった。

夏休みに入って間もなく、父が突然、美穂に良い縁談があると言い出した。

私達の父は先代——祖父が起こした不動産会社を引き継ぎ、経営している。その会社の取引先である大企業、三柳建設の御曹司おんそうしと美穂との縁談話を持ち上がっていると、父は大喜びだった。

そして後日、楓馬さんと彼のご両親を我が家に招き、私も妹として同席させられた。

当時、この縁談に乗り気だった父と違い、あちら側はあくまで一度会わせてみて、お互いに相手を気に入るようなら……と思っていたらしい。

無理もない。だって三柳家なら、他にもいくらだつて条件の良い縁談があったらうから。むしろ、一度でもチャンスをもたらえたことが奇跡だったのだ。

その奇跡は、美穂にとつても私にとつても運命の出会いとなった。

「はじめまして、三柳楓馬です」

「……っ」

我が家のリビングで初めて楓馬さんと顔を合わせた時、私は人知れず息を呑んだ。なんて綺麗な



人なんだろう……と。

彼のことは、両親から事前に聞かされていた。成績優秀で見目も良い、将来有望な若者だと。

だから元々すごい人なんだとは思っていたけれど、実際に目にした楓馬さんは、私が想像していた以上に素敵な人だった。

美しいお母様によく似た容貌は、まるで少女漫画のヒーローみたいに整っている。色素の薄い髪の毛はサラサラで柔らかそうだったし、頬に影を落としそうなほど長い睫毛に縁取られた茶色の目は、とても澄んで見えた。

女性的に整った顔立ちながら、眉やすつと通った鼻筋には男性らしい凛々しさも感じる。うつつら笑みを描いた唇は形が良く、妙に色っぽかった。

それに雰囲気も大学一年生とは思えないほど落ち着いていて、大人っぽく、恰好良い。

今まで男性へ必要以上の関心を抱いたことなんてなかったのに、私は何故か楓馬さんから目が離せなかった。

「……………」

私はいつたい、どうしてしまったのだろう。

礼儀正しく振る舞うよう、両親から事前に口を酸っぱくして言われていたにもかかわらず、声を発するのも忘れ、彼に見入っていた。

その時ふと、楓馬さんと目が合う。

(あ……)

彼は髪と同じ、色素の薄い目を大きく見開いたかと思うと、次の瞬間には花が綻ぶような笑みを浮かべた。

「……………」

彼に微笑みかけられ、胸がカッと熱くなる。

急に恥ずかしさが込み上げてきて、私はぱつと視線を逸らした。  
(どうしよう……。変に、思われたかな……)

「ちよつと、志穂。あなたもご挨拶なさい」

私が一人うろたえていた間に、美穂や両親は挨拶を済ませたらしい。

母に咎められ、三柳のご両親も私を見ていることに気づき、慌てて頭を下げた。

「あ……っ、す、すみません。はじめまして。美穂の妹の志穂、です」

「志穂……さん」

楓馬さんの形良い唇が、私の名を唱えた。

「はっ、はい」

彼が、私の名を呼んでくれた。

たったそれだけのことで、心臓が破裂しそうなほどドキドキする。

顔が妙に熱い。きつと赤くなっているだろうと思うと、余計に恥ずかしくなって俯く。そんな私に、楓馬さんは優しく声をかけてくれた。

「可愛い名前だね」

「……っ」

楓馬さんにとっては、おそらくただの社交辞令。

でも、私は嬉しかった。そして、自分の心に生まれた感情にはつきりと気づいてしまう。  
(どうしよう……)

姉の縁談相手なのに。姉と結婚するかもしれない人なのに。

私はこの時、楓馬さんに恋をしたのだ。

一目惚れだなんて、漫画や小説の中だけの出来事だと思っていた。

でも私は、自分でもどうしようもなく、彼に惹かれてしまった。

「——そうそう、三柳の奥様は音楽鑑賞が趣味でいらつしやると聞きました。実は、うちの美穂はピアノがとっても得意なんです。幼稚園のころから習わせていて、コンクールで優勝したこともありますの」

初めての感情に戸惑う私を尻目に、楓馬さんと美穂の初顔合わせは和やかに進んでいく。

話をするのは、もっぱら両家の母親達だ。特にうちの母が張り切って、三柳のご両親や楓馬さんに美穂を売り込んでいる。

「まあ、素晴らしいわ。私は聴くのも弾くのも大好きなんです。今度ぜひ一緒に弾いてみたいわね。いいかしら？ 美穂さん」

「もちろん、喜んで」

美穂ははにかんだような愛らしい笑みを浮かべて頷いた。

「私の影響で、楓馬もクラシックが好きみたいなの。子どものころからバイオリンをやっている」

「素敵ですわあ」

「ふふっ。楓馬さん、今度演奏を聞かせてくださいね」

「ええ。俺も美穂さんの演奏を聞いてみたいな」

美穂がにっこりと笑ってお願いすると、楓馬さんも笑顔を返して頷く。

大人しくて地味で、引っ込み思案な私と違って、明るく華やかで人を惹きつける美穂。誰が見ても、美穂と楓馬さんはお似合いだった。音楽という共通の趣味もあり、二人ともお互いを気に入ったらしく、話が弾んでいる。

うちの両親は終始上機嫌で愛想をふりまき、あちらのご両親も微笑ましそうに当事者達を見守っていた。

(私、この場にいる必要があったのかな……)

「……志穂さんも、何か楽器を？」

一人疎外感を覚えていると、ふいに、楓馬さんが私に話しかけてくる。

おそらく、ずっと押し黙ったままの私に気を遣ってくれたのだろう。

「え……と、私は……」

「ああ、志穂は何も」

しかし私が口を開いてすぐ、それを遮るみたいに母が愛想笑いを浮かべながらまくしたてた。

「いえね、この子にもピアノを習わせようとしたんですけど、ちつともじつとしていられなくて、すぐやめてしまったんですのよ。本当に、美穂と違ってこの子はあまり出来が良くなってくつ」

その点、美穂は……と、母は話題の中心を愛娘に戻す。

私は微笑を浮かべて、言葉を呑み込んだ。

(習わせようとした……か)

うそばかり、と心の中で嘆息する。

母は私に習い事なんてさせてくれなかった。幼稚園のころ、「私も美穂みたいにピアノを習いたい」と言った私を「あんたなんかにはできるわけないでしょ」と叱りつけ、家のピアノに触ることも許さなかった。

母は昔から美穂だけを可愛がり、私には目もくれなかったのだ。それどころか、嫌ってさえいた。その後も、楓馬さんやあちらのご両親が気を遣って私にも話題を振ってくれたけれど、その度に母が強引に美穂の話題に戻し、私はろくに会話に加われないまま最初の顔合わせが終わった。

まあ、お見合いの主役は美穂なのだから、母のやり方も間違っではないのだろう。

ただ母がことさら私を美穂と比べて貶す度、楓馬さんに痛ましげな視線を向けられるのが恥ずかしく、居た堪れなかった。

(かわいそうな子だと……思われたのかな……)

私を見る彼の瞳には、憐憫の情が宿っている気がした。

そのせいか、楓馬さんに心惹かれて高揚していた気持ちだが、すっかり打ちひしがれている。

ようやく膨らみかけた蕾が、花を咲かせる前にしぼんでしまったみたい。

(……でも、これでいいのかもしれない。だって、楓馬さんは美穂のお相手なんだから)

彼は、私なんかが好きになっていい人じゃないもの。

「——それでは、お返事はまた後日。改めてということだ」

三柳のお父様がそう言うつてうちの両親に頭を下げ、退出の意を告げる。

両親はもう縁談が成立した気であるのか、ニコニコと上機嫌な顔で「ええ、良いお返事をお待ちしております」と答えていた。

三柳夫妻と楓馬さんは車で来ていたので、桜井家の四人も家の駐車場まで出て彼らを見送ること。

美穂は三柳のお母様にとっても気に入られたようで、そこでも「今度一緒にコンサートへ行きますようね」と誘われていた。

そして運転席にお父様、助手席にお母様が乗り込み、最後に楓馬さんが後部座席に乗り込もうとする。

その間際、彼の視線が私を捉えた。

(あ………)

ただ目が合っただけで、屈いていたはずの心にさざなみが立つ。

「……………」

楓馬さんは物言いたげな表情で、そして実際に口を開き何かを言おうとして……でも結局何も言

わないまま、車に乗り込んでしまった。

あの時、彼は何を言おうとしていたのだろう。

いや、きっとそれは私にはなく、美穂に向けて告げようとした言葉だったのだ。視線が合ったと感じたのも、私に何かを言おうとしていたと思つたのも錯覚……ううん、そうだったらよかつたのにと願望だったのだろう。

もしかしたら楓馬さんは後日と言わず、その日の内に美穂へ婚約の意思を伝えたかつたのかもしれない。だつて二人はそれくらい、打ち解けているように見えたから。

そして後日、三柳家から正式な返答があり、楓馬さんと美穂は婚約を結ぶことになった。といっても二人はまだ学生ということで、正式な結納は美穂が大学を卒業してからという話だった。

やっぱり、楓馬さんは美穂を伴侶に選んだのだ。わかっていたはずなのに、その知らせを聞いた時には胸が痛んだ。最初から、私は彼にとっては縁談相手の妹に過ぎないというのに、失恋した気になるなんて、変だよ。

一方うちの両親は、大企業の経営者一族と縁を結べるとあつて大喜びしていたつ。二人の婚約を足がかりに、父の会社と三柳建設とで共同プロジェクトも始動するという話だった。

そんな両親の期待を一身に受けた美穂は、楓馬さんの婚約者として、結婚を前提にした交際をスタートさせる。

二人の仲は順調で、彼はよく美穂に会いにうちを訪ねてきたため、学校から帰ると楓馬さんと

ばつたり顔を合わせる、なんてことも多かつた。

あれは、二人が婚約を結んだ年の冬——だつただろうか。

授業を終えて帰宅した私は、家の玄関に見慣れない靴を見つけた。カジュアルなデザインの、男物のレザーブーツだ。

(もしかして、楓馬さんが来てるのかな……)

そわそわと落ち着かない気持ちのまま、私はローファアを脱ぎ、家上がった。

すると廊下の奥——美穂のグランドピアノが置いてある部屋から、微かに音が聞こえてくる。

ポーン、ポーンと、跳ねるような高い音。それはやがて、一つの旋律を描き始める。

ピアノの音だ。この家でピアノを弾くのは美穂だけだから、たぶん、楓馬さんと一緒にピアノ室にいるのだろう。

(一応、挨拶した方がいいよね……)

美穂の妹として、将来義兄になる人に失礼のないように。

そう自分に言い聞かせ、ピアノ室へと向かう。

でも本当は、ただ楓馬さんの顔が見たかっただけなのかもしれない。

(あ、もう一つ、音が……)

最初はピアノの音だけだった旋律に、艶のある弦楽器の音色が重なる。

(これは、楓馬さん……?)

近づいてみると、ピアノ室の扉が開いていて、廊下から中の様子が窺えた。

制服姿の美穂が、口元に笑みを浮かべ、楽しそうにピアノを鳴らしている。その傍らには、バイオリンを奏でる楓馬さんが立っていた。

(……綺麗……)

二人が奏でる音も、その光景も、とても綺麗だった。冬の淡い光が差す部屋で、軽やかに音楽を奏で合う恋人達。

薄暗い廊下からそれを羨ましげに見つめる私からは、別の世界の住人に思える。

(いいなあ……)

私は、美穂みたいにピアノを弾けない。他の楽器だって何も弾けない。だから、こんな風に楓馬さんと音を重ねることもできないのだ。

「……………」

疎外感が胸に込み上げてくる。

たった数歩の距離が、ひどく遠く感じられた。

同時に、これ以上近づいてはいけけないとも思った。

私なんか、二人の世界を邪魔してはいけけないのだと。

「……あ、今間違えただろ、美穂」

「いいの。コンクールに出るわけじゃないんだし、楽しく弾けたらそれでいいのよ」

「はいはい」

「そういう楓馬くんだって、さつき音外してた」

「ばれていたか」

「ばれないと思ったか」

楓馬さんと美穂は楽器を弾きながら軽口を叩き、笑い合う。

最初こそ家の思惑で引き合わされた二人だったけれど、今ではすっかり仲睦まじい恋人同士になっっていた。

そんな二人の親しげな空気がまざまざと感じられ、胸が苦しい。

(……私、馬鹿みたい)

楓馬さんの顔が見られる、なんて。何を期待していたんだろう。

彼は美穂の婚約者。美穂に会いに来たのであって、私に会いに来てくれたわけじゃない。

「……………」

美穂達が気づいていないのをいいことに、私は音を立てないようにそっとその場をあとにした。一瞬でも浮かれた自分が、恥ずかしくて仕方ない。

足音を忍ばせて二階へ上がり、自室に入る。

扉を閉めても二人の奏でる旋律が微かに聞こえてきて、私はそれから逃げるみたいにベッドへダイブし、布団を被って音を遮ろうとした。

そうして、どれくらいじっとしていただろう。

ようやく階下が静かになり、もぞ……と布団から顔を出す。

「あ………」

制服のまま潜り込んだから、スカートが皺しわになつていた。

(そういえば、美穂も制服のままだったな……)

私と美穂は別の高校に通っている。私が通う公立高校の制服はなんの変哲もない紺のブレザーとチェックスカートだけれど、美穂が通う私立女子高の制服は有名デザイナーがデザインしたセーラーカラーのワンピースタイプで、とても可愛い。

(……とりあえず、着替えよう)

のろのろと起き上がり、制服に手をかける。

するとその時、コンコンと扉をノックする音が響いた。

「志穂、帰ってるんでしょ？ 開けていい？」

「う、うん」

制服を脱ぐのをやめ、私は了承の返事をする。

ほどなく扉が開き、制服姿のままの美穂が顔を覗かせた。

「あのね、今から楓馬くんに勉強を見てもらうんだけど、志穂も一緒にどう？」

「勉強？ ピアノはもういいの？」

「あ、やっぱり聞こえてた？ あれは志穂が帰ってくるまでの暇潰しみたいなものだったから、もういいの。ほら、うちの学校も志穂の学校も、そろそろテスト期間でしょ？ だから楓馬くんに家庭教師をお願いしたの」

「そう、なんだ」

こういうことは、これまでにもよくあった。

有名国立大に現役で合格していた楓馬さんは、とても頼りになる先生だ。彼に勉強を見てもらえるようになって、私も美穂も成績が上がった。

(でも……)

「……ううん、私はいいよ」

楓馬さんがうちに来る時、何故か美穂は必ずと言っていいほど私を同席させたがる。時には、外で会う場合にさえ私を誘うことがあった。おかげで母からは、二人の邪魔をするなど叱られることもしばしばだ。

(邪魔しようなんて、考えたこともないのにな……)

どうして美穂は私を誘うんだろう。

楓馬さんと二人つきりで会いたいと思わないのだろうか？

疑問を覚えて一度尋ねたことがあったが、美穂はにっこりと花のように笑って、「二人きりで過ごす時間もちゃんととってあるから、大丈夫」と言った。

その表情には楓馬さんの婚約者として揺るがない自信が溢あふれていて、とても眩まぶしく、そして羨うらやましく思えたっけ。

「私は行かない。お邪魔しちゃ、悪いし」

ともかくにも、二人の仲の良さをこれ以上見せつけられるのが辛かったので、私は改めて誘いを断った。

だが美穂は引かない。

「志穂は邪魔なんかじゃないよ！むしろいてくれなきゃ困る」

「……？」

それは、どういう意味なんだろう？

ああでも、私を氣遣ってそう言ってくれているだけかもしれない。

「サンルームで待つてるから志穂も来て。あと、お茶もお願い。楓馬くん、志穂の淹れるお茶がお気に入りだから、よろしくね」

美穂は「来ないと、楓馬くんと一緒に迎えに来るから！」と念を押し、ボタン！と扉を閉じて去っていった。

美穂は一度言い出したら聞かないところがある。たぶん、無視したら本当に楓馬さんを連れて襲撃してくるだろう。

ちよつと我儘で、でもそんなところも可愛い我が家のお姫様。それが美穂だ。

幼稚園のころは、そんなお姫様氣質の美穂に数少ない玩具をとられたり、意地悪されたりしたこともあった。美穂はあんなにも両親——特に母親に愛され、欲しいものはなんでも買ってもらったのに、大人しくて暗い性格の私が気に入らなかつたのか、何かとちよつかいをかけてきたのだ。

でも年を重ねるにつれ、美穂は私に敵意を向けなくなっていた。それどころか私を気にかけて、面倒を見てくれるようになったくらいだ。

今回みたいに振り回されることもあるけれど、私はそんな美穂が好きだし、今では姉妹仲も悪く

ない……というか、良い方だと思う。

もし小さいころのまま私達の仲が悪かつたなら、楓馬さんに恋心を抱くことへの罪悪感も、もっと薄くて済んだのかもしれない……

美穂が好きだからこそ、美穂の好きな人を想うのが後ろめたくてならない。

「はあ……」

私はため息を一つ吐き、ベッドから下りた。

とりあえず、襲撃される前に下へ行こう。

幸いなことに、母は先日から学生時代の友人数人と旅行に出かけている。二人の邪魔をするなど文句を言われることはない。いや、この場合は幸いではないのかな。

婚約者同士の逢瀬を邪魔するようで、やはり気乗りはしない。二人の仲の良さを見せつけられ、落ち込んでいたから、尚更だ。

けれどそう思う一方で、楓馬さんに会えることを喜ぶ自分もいた。

彼は姉の婚約者だ。しかも、二人はとても仲睦まじく、傍から見てもお互いを想い合っているのがよくわかる。

そんな相手に恋心を抱いてはいけない。どんなに想ったところで報われるわけもなく、ただ辛ただけだとわかっている。

なのに……

(どうして、かな……)

わかっているのに、一度芽生えた想いはなかなか消えてくれなかった。それどころか、楓馬さんと顔を合わせる度にその想いは存在感を増していく。

初恋は叶わないと言う。叶わないなら叶わないで、こんな気持ちはず早く消えてくれればいいのに、それすら叶わない。ままならない自分の心が、厭わしくて仕方なかった。

いっそ告白でもして玉砕すればスッキリするだろうか。そう考えたこともあったけれど、結局想いを告げる勇気を持たず、今に至る。だって二人が結婚すれば、これから先も親戚付き合いが続くのだ。そんな相手に告白して、ふられて気まずい思いをするのは嫌だ。もしそんな状況になったら、楓馬さんだって気まずく感じるだろう。

好きだから、会いたい。

一方で、好きだからこそ会いたくない。

そんな複雑な胸中のまま、私は制服から私服に着替え、勉強道具一式を持って一階に下りた。

まずはキッチンに寄り、三人分の紅茶を用意してサニタリーへ向かう。勉強道具もあるので、ティーセットはトレイごとワゴンに載せて運ぶことにした。

「あはははは、楓馬くん、そんなことやったの？ 馬鹿だなあ〜」

「上手くいくと思ったんだよ。結果、大失敗だったけど」

サニタリーの前に来ると、扉越しに美穂の軽やかな笑い声と楓馬さんの苦笑混じりの声が響く。

その声を聞き、私は扉を開けようとしていた手をはっと止めた。

なんだか、とても楽しそう。そんなところに、私なんかが入っていつていいのだろうか。

二人の世界が壊れるのではと、尻込みしてしまう。

先ほどピアノ室に入れなかった時と同じだ。切ない思いをしたくないと、臆病な私がまた逃げたがっている。

（やっぱり、誘いを断って部屋に引き籠ろうかな……）

そんな考えが頭をもたげたが、私の訪れに気づいたらしい美穂から扉越しに「志穂？」と声をかけられ、逃げることは諦めざるをえなかった。ここまで来て部屋に帰ったら、きつと変に思われる。私はふうっと息を吐いたあと、躊躇いがちにサニタリーの扉を開けた。

我が家の一階、南側に位置するサニタリーは、母の自慢の一つだ。壁や柱は白く塗られ、板張りの床の上にはアンティークのテーブルセットが置かれている。部屋のそこかしこに観葉植物のグリーンがあり、ガラス窓から見える庭の風景と相まって、とても居心地の良い空間に仕上がっていた。

でも今の私には、自分一人が場違いに思えてひどく落ち着かない。

「もう、遅いよ志穂。待ちくたびれた」

「こんにちは、志穂」

大きな円形のテーブルに隣り合って座る美穂と楓馬さんが、笑顔で私を迎える。

いつからか、楓馬さんは婚約者を『美穂』と、名前で呼ぶのと同様に、私のことも『志穂』と呼ぶようになっていた。

「こんにちは、楓馬さん。待たせてごめんね、美穂」



「そこまで待つてないから、美穂の言うことは気にしなくていいよ」

楓馬さんに挨拶を返し、美穂へ謝ると、彼がすかさずフォローしてくれる。

「なによそれ。もう、楓馬くんはほんつとうに志穂に甘いんだから」

美穂はくすくすと笑って、私が運んできたワゴンから自分と彼の分のティーカップをとり、優雅な仕草で紅茶を口に運んだ。我が姉ながら、そんな姿すら一幅の絵のように品がある。

「そうかな？」

「そうだよ。それで、私には全然優しくない」

(そんなこと、ないと思うけど……)

私は二人の向かいの席に腰かけ、心の中で美穂の言葉を否定する。

だって、楓馬さんはとても優しい。まめに婚約者に会いに来てくれるし、よく美穂にプレゼントを贈っているのも知っている。しかも、婚約者へ贈るついでにその妹である私の分まで用意してくれるのだ。

勉強だって懇切丁寧に教えてくれるし、美穂と一緒に映画や食事に連れていってくれることだって……

婚約者の妹である私にさえそこまで気を遣ってくれているのだから、本命の美穂にはより心を配っているのだろう。

もともと、美穂も本心から文句を言ったわけではないようだ。たぶん、可愛く拗ねてみせただけなのだと思う。美穂はそういう態度もよく似合った。

そんな甘え方、私にはできない。たとえてみたところで、周りの輿意見をかうだけだろう。

楓馬さんは、拗ねる美穂に仕方ないなあと言わんばかりの微笑を浮かべつつも、優しい眼差しを向けていた。ちよつと我儘なところさえ、可愛くてならないと思っていそうな顔だ。

(……本当に、絵に描いたようにお似合いの二人だなあ……)

二人の仲の良さを見せつけられる度、胸がちくんと痛む。

いつになったら、この痛みを感じなくなるだろうか。

いつまで待てば、この想いを諦めることができるだろうか。

私の初めての恋は、そんな風に消えてなくなる日を待つばかりのものだった。

楓馬さんに、好きな人に会えるのは嬉しい。

でもやっぱり、美穂と愛し合う彼の姿を見るのは辛い。

彼に愛されている美穂が羨ましくて、妬ましくて仕方なかった。

そんな醜い感情なんて抱きたくないのに、二人を見てみると、どうしても嫉妬してしまう。

「志穂、どうしたの？」

美穂と談笑していた楓馬さんが、ふいに声をかけてくる。

暗い顔で押し黙っていたから、不審に思われたのだろう。

私は慌てて笑顔を取り繕い、「なんでもないです」と言って、自分の前にもティーカップを置いた。

「そうだ、お茶、ありがとうね。志穂の淹れてくれる紅茶はとても美味しいから、いつも楽しみに

しているんだ」

楓馬さんは微笑を浮かべ、ティーカップに口をつける。

そして一口飲んでから、「うん、美味しい」と褒めてくれた。

「ほら、言ったでしょう？ 楓馬くんは志穂の紅茶がお気に入りなの。もちろん私も好き」

「美穂はお茶を淹れるの下手だもんね」

「ほっといて！ 私には志穂がいるからいいの！」

からかうように言う楓馬さんに、美穂はふんつと顔を背ける。

親しげな二人のやりとりがちくちくと痛む胸を誤魔化し、私は曖昧に笑って問題集を開いた。

こうなったらもう勉強に集中してしまおう。早く終わらせて、この場から逃げ出そう。

だってやつぱり、これ以上この二人と一緒にいるのは苦しいもの……

そんな風に、楓馬さんと出会ってからの日々は、叶わぬ恋に身を焦がした記憶ばかりだったように思う。三人で会うのは楽しかったけれど、同じくらい切なかった。

そういえば一度だけ、楓馬さんと二人きりの時があったっけ。

あれは私達が高校三年に進級する前、まだ肌寒い三月の始めごろのことだった。

彼とデートの約束をしていた美穂が急に体調を崩してしまい、代わりに行ってくれと頼まれたのだ。その日のデートは二人が好きなクラシックのコンサートで、せっかくとれたチケットを無駄にしたくないからと。

美穂の代わりに待ち合わせ場所に現れた私に、楓馬さんはがっかりした風も見せず、「志穂が付き合ってくれて嬉しい」と言ってくれた。

本当は美穂と来たかったろうに、彼はクラシックに不慣れな私を気遣い、解説を交えながら、初心者でも楽しめるよう気を配ってくれたのだ。

楓馬さんと一緒に素晴らしいオーケストラの演奏を鑑賞できるなんて、まるで夢みたいな時間だった。けれど、コンサートを終えて会場から出たとたん、私のお腹がぐうぐうと鳴ってしまう。「あ……」

今回のコンサートは十九時開演の二十一時終演とやや遅い時間で、夕食はこのあとに予定していたから、私はとてもお腹が空いていた。でもだからって、好きな人の前でこんな大きく鳴らなくてもいいのにと、泣きそうになる。

「ごめん、夕食を先におけばよかったね」

「う、ごめんなさい」

楓馬さんが謝ってくれるのがかえって申し訳なく、恥ずかしかった。

すると彼は、突然「あつ」と声を上げて、会場近くの公園へ走っていく。

慌てて追いかけたところ、楓馬さんはそこに来ていた石焼き芋の屋台で、焼き芋を一本買っていた。

「レストランまでは少し時間がかかるからね。一緒に食べよう」

彼は熱々の焼き芋を半分に割り、片方を私に差し出す。

そうして自らも焼き芋を頬張り、笑ってこう言った。

「実は俺もお腹が空いててさ、演奏中もこつそりぐうぐう鳴らしてたんだ。気づいてた？」

「い、いえ……」

そんなこと、全然気づかなかった。

ううん。今にして思えば、あれは私の気持ちを軽くするための優しいうそだったのだろう。

高級レストランのディナー前には不似合いな、屋台の焼き芋。寒空の下、二人で半分こして頬張った温かいそれは、とても美味しかった。

未だに石焼き芋の屋台を見ると、あの夜のことを思い出す。

初めて楓馬さんを独り占めできて、嬉しかったなあ……

もしあの時、勇気を出して自分の想いを伝えていたら、もう少し違う未来になっていただろうか。でも私は告白する勇気を持てず、さりとて想いを捨てることもできず、顔を合わせることには楓馬さんへの想いを募らせ、姉の婚約者に未練がましく恋心を抱き続けた。

そんな自分が嫌でたまらなかつたし、これ以上美穂に嫉妬心を抱くのも苦しかったので、私は大進学を機に実家を出て、美穂と楓馬さんの二人から距離を置くことにした。

元々、高校を卒業したら家を出ようとは思っていたのだ。私は美穂と違って、家族と上手くいっていなかったから。両親が関心を抱くのは美穂だけで、私はそのおまけみたいなもの。いてもいなくても、どうでもいい存在だった。

幼いころはそのことが悲しくて、なんとか両親の気を引こうとあがいたけれど、中学、高校時代

にはそれさえ諦め、ただただ家族と離れ、一人で生きていくことばかりを考えていた。

金銭的には、恵まれていた家庭だったと思う。

暴力を振るわれたり、育児放棄をされたりしたわけでもない。

だけど、あからさまに美穂と差をつけられるのは辛かった。どうして私だけ愛されないんだろうって傷つくことに、疲れていたのだ。

双子なのに、同じ両親の娘なのに、何故こんなにも扱いが違うんだろう。そう思わない日はなかった。

そんな冷たい家の中、姉は、美穂だけは、私に優しくかった。時折ある母のヒステリックな罵倒から庇ってくれたし、自分と妹の扱いに差をつける両親に文句を言ってくれたし、自分にだけ贈られるプレゼントの中から、一番素敵なものを私に譲ろうとしてくれた。

『志穂は、私の可愛い妹だよ』

何度そう言って、私を慰めてくれただろう。

家の外に親しい人——少ないながらも友達と呼べる人はできたけれど、もし美穂がいなかったら、私はあの家で強い孤独感に苛まれ、おかしくなっていたかもしれない。

でもそうやって美穂に庇われる度、両親に文句を言っても責められない姉の姿を見る度、苦しくもあった。自分がよりみじめに思えてたまらなかつたのだ。姉との違いを、まざまざと見せつけられたような気になった。

そんな優しい姉にさえ醜い嫉妬心を抱いてしまう私と違って、美穂は心まで綺麗な人だった。楓

馬さんが美穂を愛するのも当然だ。

正反対の姉の存在は、私にはあまりにも大きく、眩<sup>まよ</sup>すぎた。これ以上美穂への羨望<sup>せんぼう</sup>が募<sup>もつ</sup>る前に、離れた方がいいと思っただの。

そういう思いもあって、高校を卒業した私は、大学の近くにある古いマンションで一人暮らしを始めた。

両親は学費や生活費だけは世話してくれたものの、あとは予想通り無関心。

一方、美穂のことは手元に置きたがり、大学入学後も実家を出ることを許さなかった。

思えば高校に進学した時も、美穂には熱心に有名な私立の女子高を勧め、私の進路は家の体面を傷つけないけれどどこでもいいといった態度だったわけ。

つくづく、あの両親にとつて『可愛い娘』は美穂だけなのだと思える。

けれど、初めての一人暮らしや大学での生活はとても自由で、私の狭かった世界を広げてくれた。地元に行ったところみたいに、姉と比べられることはもうないんだと思うと、心が穏やかになった。

勉強を頑張つて、バイトにも励んで、新しい友達が増えて。少しずつ、自分を肯定できるようになつていった。少しずつ、前向きになれた。

あの時家を出ていなければ、私はきつと今よりもずっと暗くうじうじとした、劣等感<sup>かていこう</sup>の塊<sup>かたまり</sup>になつていたと思う。

一人暮らしを始めてからも時折、美穂や楓馬さんから「久しぶりに三人で会わないか」「一緒に食事に行かないか」と誘われることがあつた。

あの二人だけは、家を離れて一人暮らしをしている私を気遣つてくれたのだ。

嬉しかった。けれど私はそれを、学業やバイトを言い訳にして断り続けた。

二人と会つてしまえばまた、楓馬さんへの想いや美穂への嫉妬<sup>しつと</sup>が再燃してしまうと思つたから。だから実家にもほとんど帰らなかった。

そうして時が経てば、いずれ楓馬さんへの想いも薄れ、穏やかな気持ちで二人の結婚を祝福できると信じていた。